

大正期『名古屋新聞』音楽記事索引データベース試行版の公開にあたって

愛知県立芸術大学「鈴木政吉プロジェクト」

代表：井上さつき（音楽学部教授）

学生メンバー：七條めぐみ、鈴木春香、畑陽子、近藤広基

オブザーバー：小沢優子（本学非常勤講師）

私たちは現在、大正年間に『名古屋新聞』に掲載された音楽記事を集め、その索引をデータベース化したものを公開するプロジェクトを進めています。今回、試行版として、演奏会記事のデータベースを本学図書館のHPを通じて公開することになりました。

●鈴木政吉について

鈴木政吉（1859-1944）は、三味線製造から独学でヴァイオリン製作に挑み、量産化に成功した、名古屋生まれの日本の弦楽器製作のパイオニアです。

尾張藩の下級武士の息子として生まれた鈴木政吉は、明治20年に初めてヴァイオリンを目にし、見よう見まねでヴァイオリンを作り上げ、その後家業となっていた三味線店を廃業し、ヴァイオリン製造を本職とします。明治末期には工場での量産体制を確立し、鈴木ヴァイオリンは国産弦楽器のトップ・メーカーとなりました。

大正期にはヴァイオリンの棹を削る機械を開発し特許を取るなどして、量産品としては国際的に通用する楽器へとレベルアップを成し遂げます。鈴木ヴァイオリンは国内外のさまざまな博覧会においても受賞を重ね、それを梃子に輸出へと踏み出し、欧米市場への参入を果たしました。

第一次大戦中は、諸外国への輸出が大幅に伸び、大正10年前後には、1000人を超す従業員が毎日500本を量産し、年間10万本を輸出したこともありましたが、大戦後は、不景気と輸出の減少により人員削減を迫られました。そのような状況で、鈴木政吉は、追求する音色の方向性をクレモナのオールドヴァイオリンに定め、昭和19年に亡くなるまでヴァイオリン作りの研究を続けました。

●「鈴木政吉プロジェクト」

「鈴木政吉プロジェクト」は、鈴木政吉研究の資料調査のために作られた研究グループで、当初は戦前の名古屋新聞に掲載された鈴木政吉と鈴木ヴァイオリンに関する記事の収集から始めました。

そののち、私たちは、鈴木政吉と鈴木ヴァイオリンに関する記事だけではなく、音楽記

事全体を収集していく方針に切り替えました。新聞紙面を 1 ページずつ見ていく地道な作業の成果を広く役立てていただきたいと考えたからです。

このプロジェクトについては、平成 25 年度愛知県立芸術大学学長研究費の助成を受けています。

1. 新聞記事の検索

音楽関係の新聞記事を集めたものとしては、冊子体では、秋山龍英編著『日本の洋楽百年史』（1966）や、明治期については、『東京日日新聞音楽関係記事集成』『同 記事内容注解・人名索引』（1995）などがこれまでに刊行されています。

さらに、戦前の紙面に関しては、最近の電子情報サービスにより、朝日や読売など、大新聞の記事がインターネットで検索できるようになったため、飛躍的に簡単に情報が入手できるようになりました。

しかし、冊子体のものは東京に関してのみ、電子情報サービスによる紙面検索も、東京版あるいは大阪版のみで、名古屋に関しての音楽記事を拾うことは不可能です。

一方、名古屋の地元紙である『中日新聞』についていえば、この新聞は昭和 17 年 9 月にそれまでの二大地方紙である『新愛知』（明治 21 年 7 月創刊）『名古屋新聞』（明治 39 年 11 月創刊）が合併して作られたものですが、戦前の新聞に関しては、マイクロフィルム化されているものの、データベース化は行われていません。

2. 『名古屋新聞』大正期の調査と音楽記事のデータベース作成

2011 年に名古屋市鶴舞中央図書館に『名古屋新聞縮刷版（オンデマンド版 双光エシックス社制作）』に収蔵されたことから、これを使用して、大正期の音楽記事の調査・収集を行うことが可能になりました。実際の作業は、プロジェクトのメンバーである学生が担当しました。

その後、愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館の助言も受けながら、今回収集した名古屋新聞の音楽記事の索引をデータベース化する作業に入りました。新聞記事の索引は全国で数多く作られていますが、芸術関係（音楽）記事索引はあまり例がなく、愛知県に関するものは特に意義があると考えられます。

索引作成にあたっては、以下の原則を立てました。

- ①収録対象範囲は音楽に関係する記事
- ②記事の表示の仕方は記事見出しを抜粋し、補足説明はメモにする
- ③件名（テーマ）の設定は、演奏会、鈴木ヴァイオリン、広告、その他とする
- ④索引の並び順は年代順とする
- ⑤備考欄に、洋（洋楽）、邦（邦楽）、軍（軍楽）、不（不明）という表示をする。

今回、公開するのは、このうち、演奏会についてまとめたデータベースの試行版です。

初めての試みで、不備な点もあり、また記事の取りこぼしもあると思いますが、順次、修正していく予定です。

今後、順次、ほかのテーマについてもデータベース化を進め、公表する予定です。

3. 意義

近代日本音楽史においては、従来、東京中心の記述が行われてきましたが、地方都市での音楽生活の実態については、ほとんど踏み込んだ研究はなされていません。音楽記事索引のデータベース化は、大正期名古屋の音楽生活の実態を把握することに役立ちます。また、「洋楽受容」だけでなく、ほかの音楽分野についても対象とすることにより、さまざまなジャンルの和洋音楽が総合体として名古屋の音楽生活を豊かにしていたことが、具体的に明らかになります。

4. 新聞の演奏会記事索引から見えること

この時期の演奏会記事索引から、どのようなことが分かるのでしょうか。調べる側の興味の持ち方によって、記事索引はいろいろな使い方ができます。

大正年間には、日本の洋楽受容のあり方ががらりと変化した時期です。演奏会の記事の一覧から、たとえば、名古屋で、当初邦楽中心だった音楽界が、洋楽中心に変わっていく様子が見て取れます。第一次大戦後は著名な外国人演奏家が数多く来名していることもわかりますし、名古屋からヨーロッパに音楽留学する日本人も話題になっています。

また、名古屋には第一次大戦中 500 名のドイツ軍俘虜が収容されていましたが、新聞記事からは、名古屋市民と俘虜が音楽を通じて文化交流を行っていたことがうかがえます。

5. 実際の記事

今回公開する情報は「記事索引」のデータベースで、記事そのものではありません。しかし、愛知県図書館、名古屋大学等、マイクロフィルムの形で『名古屋新聞』を所蔵している図書館もあるので、索引を使って記事の年月日がわかれば、記事に行きつくことができます。